

古代日本語の有声語頭子音

中村雅之

1. 語頭に濁音は立たない？

日本語（和語）の特徴として濁音（有声子音）が語頭に立ちにくいということが挙げられる。漢語や欧米からの外来語にはふんだんに現れるのであるが、和語における名詞・形容詞・形容動詞などの生産的な語彙には、濁音で始まる語は極端に少ない。

「抱く、出る、薔薇」などは濁音で始まっているが、それらの文語形は「イダク（ウダク）、イヅ、イバラ（ウバラ）」であり、いずれも語頭の母音が脱落した結果生じた語形と見なされる。これらの他には「ぶつ（打つ）、ぼやく、ばらす、ごろつき」などいかにも卑俗的な語彙があるが、近世以降に生まれた語と考えられる。

では、日本語には濁音で始まる語がほとんどないという事実をどのように解釈すべきなのであろうか。ここでは一つの可能性として、古代には語頭にも濁音が立ったが、それらは文献以前に全て無声化した、という仮説を提出してみたい。この仮説の拠り所は、擬声語・擬態語において「ゴロゴロ、ザラザラ、ブクブク」など濁音で始まるものが無数に存在するという事実である。これら濁音で始まる擬声語・擬態語のかなりの部分が（現在と全く同形ではないにせよ）文献以前までさかのぼりうると考えてよいならば、日本語において語頭に濁音が立つことはそれほど不自然なことではなかったことになる。そうであればこそ、漢語が流入した時、多くの濁音で始まる語がさしたる抵抗もなく受け入れられたのであろう。

2. 擬声語・擬態語における保守性

ハ行の子音が古代に*pであったということはすでに広く認められている。それには多くの根拠があるが、その一つとして擬声語・擬態語（以下単に擬音という）の存在がある。例えば、「ピカピカ」という擬音と密接な関係を持つ動詞に「ひかる」がある。他の「コロコロぶ」、「ユラユラゆらぐ」などを参照すれば、「ピカピカ」に対しては当然「ぴかる」が想定される。それが現在「ひかる」であるのは、ハ行が（語頭で）*p>φ>hと変化した証であるとされる。

このように、一般語彙においてはハ行音が音韻変化を経ているのに対して、擬音はその変化を免れている。換言すれば、擬音には非常に保守的な性格があるということである。

3. 擬声語・擬態語から派生した一般語彙

「ピカピカひかる」のようなハ行の子音におけるのと同様の関係が濁音にも見られる。ここではまず以下の3例を検討してみたい。

- (1) 「ドキドキ」「ときめく」
- (2) 「ザワザワ」「さわぐ(騒)」
- (3) 「バタバタ」「はためく、はた(旗)」

まず(1)であるが、「ときめく」の「めく」は「ユラめく」「ヨロめく」「キラめく」など

擬音を動詞化する接辞である。胸がドキドキすることを「ときめく」という。「ドキドキ」という擬音から、初期の形式は「どきめく」であったと考えられる。語頭で*doki->tokiのように無声化が生じたのである。(ここでの音声記号は単にイメージを与えるためのものであり、i/e/oにおける甲乙類の区別は無視してある。以下同様。)

(2)も全く同様である。「さわぐ」の「ぐ」も「ソヨぐ」「ユラぐ」など擬音を動詞化する接辞で、古くは「く」と清音であった。ザワザワと騒音を立てるのが「さわぐ」であり、初期の形式は「ざわく」であったと考えられる。この場合、「サワサワ」という擬音から作られたと考えることも不可能ではないが、私個人の語感からは「ザワザワ」の方が適当であるように感じられる。サ行の類例としては、「さざめく」がある。この語はおそらく「ザーザー」という擬音に「めく」が付いたもので、「ざざめく」が初期の形式である。実際、中世において「ざざめく」という形式であったことは、文献によって確認されている。したがって、「さざめく」は近世以降の形式で、zazameku>sazameku という語頭の無声化が文献で確認できる珍しい例である。「さわぐ」も*zawaku>sawaku>sawagu の変化を経たものと考えられる。

(3)は「バタバタ」と「パタバタ」のいずれとも関連させられそうであるが、「はためく」が旗のはためき以外にも、鳥の羽ばたきや雷鳴などをも表現することを考えれば、「バタバタ」と関連するものと思われる。その場合、**b>*p の無声化が生じ、その後さらに変化して現在のhになったことになる。

4. 無声化の要因

以上で、古代の日本語で語頭に有声子音が立ち得たことを示したつもりである。わずか3例の検討であったが、当然他にも多くの有声語頭子音が存在したはずである。そして文献以前に、すなわち、漢語の語彙が大量に流入するよりも前の段階で、一律に語頭の無声化が起こり、日本語の(擬音以外の)一般語彙からは有声語頭子音はほぼ消えてしまう。この無声化がもしも漢語流入以後に生じたのであれば、当然漢語からも有声語頭子音は消えたはずである。したがって、無声化の時機は遅くとも漢語流入以前ということになる。

それでは、なぜ語頭で無声化が生じたのか。妄想をたくましくするならば、それは朝鮮半島から渡来した人々の影響ではなかったか。彼らが現在の朝鮮語と同様の特徴をもった言語の話し手であったとすれば、語頭で有声音を発音することが非常に困難であったと容易に想像できる。彼ら自身の言語において語頭に有声音が立たないからである。彼らが各分野において重要な文化活動をになった結果、彼らの話した日本語が先住の日本語話者にも影響を与え、とりわけ支配者層や上流階級の人々に広まったと想像される。逆に言えば、下層の言語や卑俗な語彙においては語頭の無声化は必ずしも生じなかった可能性もある。したがって、近世以降に生まれた濁音で始まる語が、いずれも卑俗的な響きをもっているのも、あながち偶然ではないのかも知れない。